博多織プロモーション計画４（３）

―伝統産業を基礎とした映像コンテンツの構築と新たなアーカイブの考察―

Hakata-Ori Promotion Project 4 (3)

―Consideration of the construction of picture contents based on a traditional industry and the Next-generation archive―

星野浩司　井上友子　佐藤佳代　青木幹太　荒巻大樹

Hoshino Koshi　Inoue Tomoko　Sato Kayo　Aoki Kanta　Aramaki Daiki

九州産業大学　芸術学部

The “Hakata-Ori Promotion Project” since the inception of the program in 2008, has become “Hakata-Ori Promotion Project 4. ”The objective of this year’ s program was a, “Participation in the Society as a whole”. This project was planned to foster the younger generation, whom are interested in the　participating in the regional industries through art. They also gained experience in the field through coverage and the Program production in conjunction. This presentation is a review of the students majored in the studies such as; Photography, Imaging Arts. Such experiences were fostered through with the cooperation from the regional industries as well as experiences gained in the field and the other relevant social activities.

Key words: participation, experience, social activities

１．はじめに

伝統的工芸品産業はこれまで、永きに渡り、各地域に密着した生活用品を提供する産業として、私たちの生活文化を豊かにし、国民生活を影ながら支えるという貴重な役割を果たしてきた。もとより伝統的工芸品産業は、「ものづくり」を経済発展の基盤とする日本の原点ともいえ、国民の知恵の結晶ともいえる。しかし、近年、多くの産業基盤が変化し、長引く経済不況を背景として国際化が進展するなか、安価な輸入品が大量に国内に流入し、大量消費社会が国民生活様式を大きく変化させた。引いては、伝統的工芸品産業の需要は低迷し、産業を取り巻く環境の変化に伴い、経営難や後継者不足などの諸問題は深刻化している。(財）伝統的工芸品産業振興会の調べによれば、2009 年度の生産額は、約 1,281 億円（前年比約 13%減）であり、ピーク時の 1983 年の 5,400 億円に比べ、その数値は約 4 分の 1 へと減少している。現在も、伝統的工芸品産業を取り巻く環境はますます厳しくなる一方であり、当該産業の存立も危機的状況下にあり、かつてない苦境に立ち至っている。しかし、このような状況において、需要の開拓、新商品の開発、流通形態の見直し、他地域や他産業・他分野との連携など、新たな需要の開拓を積極的に行う動きもある。

本論文の研究対象とした博多織産業においては、業界の有志が博多織の技術と文化やその他、モノづくりを行う上で必要な知識の習得や感性の練磨を行う「博多織ディベロップメントカレッジ」という２年生大学を６年ほど前より設立し、後継者の育成や博多織産業の振興に資する取り組みを行っている。特に、博多織産業においても他の産業と同様、後継者育成と伝統的技術の継承は急務であり、より多くの具体的取り組みが求められている。

本研究は、博多織産業において経年で引き継がれてきた人々の「思い」をテーマとし、それら人々の中にある「記憶」を映像や画像でデジタル媒体により記録することで、後世に向けたアーカイブを実践する。また、それらの記録素材を再編集し、新たに作品として構成することで、伝統的工芸品産業の新たな「魅力」の再発見を目的とする。

２．アーカイブと博多織の新たな「魅力」探求の模索

九州産業大学では、芸術学部が活動主体となり、NPO 法人博多織デベロップメントカレッジと博多織工業組合の協力のもと、博多織の振興を目的とする産学連携活動を 2008 年よりこれまで４ヵ年に渡り行ってきた。この産学連携活動を「博多織プロモーション計画」と称し、福岡の伝統的な産業である博多織および博多織に関連する地域文化の魅力を大学の視点から捉え、多様な媒体や作品を通して、博多織伝統産業の振興を目的とした情報発信を行っている。この中で、芸術学部の美術学科、デザイン学科、写真映像学科の３学科それぞれの専門性を活かした作品作りを通して、それぞれに所属する学生が主体となって産学が連携する実践教育を目的とした活動を行っている。特に、昨年度の研究活動では、これからの博多織を担う若い織師を主人公に、年間を通じて取材し、インタビューなどを含むドキュメンタリー形式の映像作品を制作している。この中では、２０代～３０代の女性を中心に、仕事を辞めてまでも織師を目指す人々が増えているという事実に対し、それらの人々を惹き付ける博多織の魅力とは何なのか、また、それら若き継承者はこれからどのような人材となっていくのか？それらについて詳細な取材に基づき映像化し、社会背景と職業感の変化との因果関係について分析を行っている。４年目にあたる本研究活動では、昨年度のドキュメンタリー映像制作時に行ったインタビュー取材のアーカイブ的側面に着目し、伝統的工芸品産業の持つ「魅力」について、さまざまな分野の人々をドキュメンタリー形式でインタビュー取材し、それらのデジタル映像素材を詳細に分析することで、各素材が導くキーワードを手がかりとして、人々が博多織に寄せる「思い＝魅力」の検証と考察を行っている。

３．研究手法

３．１．博多織師のドキュメンタリー写真とインタビュー取材によるアーカイブ（図-1）

現在、博多織業界は他の伝統的工芸品産業と同様、需要の低迷や後継者不足など深刻な状況にある。しかし、近年、先進的テクノロジーがもてはやされる一方、国内の基礎的技術力の低下が懸念される中にあって、ものづくり、特に「日本の技」の原点である伝統的工芸品産業が再評価される兆しも現れている。特に、かつて無い未曾有の被害を招いた震災を経て、「日本人」としての価値観を見直す気運がより高まっている。そのような中、博多織産業では２０代～３０代の女性を中心に織師を目指す人々が増えている。そこで、今回は、そのような女性博多織師の普段の活動を通し、若手の博多織師の博多織に対する思い

図-1（博多織手織技能修士）上野氏：左・（同左）古賀氏：右

図-2 映像作品「博多織、その魅力-博多織の魅力に惹かれた人々－」

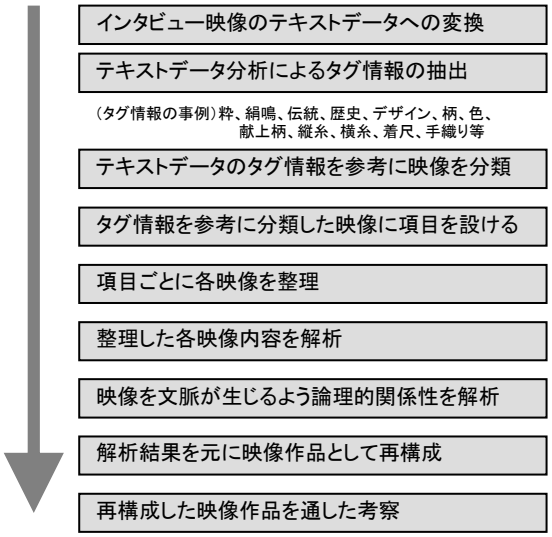

図-3 解析手法の概略

や作品作りの魅力についてデジタル写真を用いたドキュメンタリー形式の画像アーカイブを行っている。

・取材対象：女性博多織師２名
・取材期間：2011 年５月～12 月
・取材場所：福岡市博多区山王 機場、博多町屋ふるさと館、承天寺　御供所町ほか
・使用機材：Canon EOS 5D MarkⅡ
・画像フォーマット：RAW 5616×3744 pixel
・取材スタッフ数：学生３名、指導・監修の教員１名

３．２．博多織関係者のインタビュー取材によるドキュメンタリー映像を用いたアーカイブ（図-2）

伝統的工芸品産業が斜陽の時代を迎える中、「日本」の“ものづくり”を再評価する動きもある。博多織においても、古くからその産業に携わる人々や、それらを身に付け、永きに渡り愛好する人々など様々な人間が関わっている。それらの人々にドキュメンタリー形式の映像としてインタビュー取材を行い、夫々の立場から博多織の「魅力」について様々な意見を述べてもらった。また、収録したそれらの素材を映像アーカイブとして記録し、単にデジタル映像の記録データとして保管するのではなく、それらの内容を解析、タグ付けした映像フォーマットを再構成することで、各分野のそれぞれ多角的な検証を目指した。

・取材対象：博多織業界関係者６名、一般の愛好者６名（内２名は着付け教室講師）
・取材期間：2011 年５月～12 月
・取材場所：福絃織物株式会社、株式会社サヌイ織物、装道礼法きもの学院福岡校、承天寺ほか
・使用機材：SONY HDR-AX2000、（東芝ﾗｲﾃｯｸ）AL-LB-5-2-N ﾊﾞｯﾃﾘｰﾌｫｰｶｼﾝｸﾞﾗｲﾄ、SONY UWP-V1 UHF ﾜｲﾔﾚｽﾏｲｸﾛﾎﾝﾊﾟｯｹｰｼﾞ、ｼｸﾞﾏｼｽﾃﾑ KS-T200 3ｃｈｺﾝﾊﾟｸﾄﾐｷｻｰ、Libec RS-350 三脚
・映像フォーマット：HD 画質：FX（24Mbps）
・取材スタッフ数：学生５名、指導・監修の教員１名
・映像の解析手法：解析の大まかな流れは図-3 の通りである

４．考察

本研究では福岡の伝統的な産業である博多織をモチーフとして、新たなアーカイブのあり方を模索し、博多織の魅力についてより高次元の解析を目的とした画像と映像によるデジタルフォーマットの記録と作品作りのための取材を行った。写真によるドキュメンタリー形式の画像アーカイブでは、取材した若い女性織師が博多織とは無関係の職場で勤務していたにも関わらず、自らを表現する場として博多織業界を選択していたことが分かった。さらに、博多織の 770 年を超える歴史と伝統を基礎に、様々な制作手法や意匠のあり方を模索する若い感性とその取り組みが博多織産業の将来に向けた再生の礎となることが期待される。このように、既に勤務していた企業を辞してまで、博多織業界に飛び込む女性が増えている現状は、現代の職業観の変化を表す顕著な事例である。また、後継者不足を懸念する伝統的工芸品産業界において、このような価値観の変化を捉えた若い人材の育成は将来を見据えた当産業の継承を促す重要な手掛かりになると考える。さらに、映像によるアーカイブでは、映像分析で得たタグ情報を元に、映像作品として再構成を行った。映像作品として文脈を考慮し、「・博多織の良さ・絹鳴・粋・献上柄・模様、柄、色・作り手の思い・博多織の可能性・博多織の未来といった」項目を設けている。これらのタグ情報や映像項目の解析を行う中で見えてきたものは、博多織という伝統的工芸品は作り手とそれを着る側において、「献上柄のデザインとしての普遍性」や「博多の伝統」、「品質の高さ」など同様の点に魅力を感じている面もあれば、「糸が織成す色の無限性」「様々な意匠への可能性」など作り手独自が感じている魅力も語られている。そのような言葉の１つ１つを解析した結果、博多織を７７０年以上に渡り継承してきた博多人の誇りとそれを愛する人々の共通の思いが博多織を不滅の伝統として支えていることが考察された。